

公手博さん・羽間美智子さんの
思い出

田中 實

(たなかみのる
尼崎郷土史研究会会長)



私が属している尼崎郷土史研究会で活躍され、多くの業績を残された二人の郷土史家が、最近、亡くなられた。お一人は、二〇年近く「古文書講座」の講師として活躍された公手博さん(令和二年一〇二〇―一月死去)、もうお一人は、前会長の羽間美智子さん(令和三年三月死去)である。二人ともご高齢であったが、私としては、先輩会員としてもう少し御指

導を戴きたかった。私はその任にないけれども、お二人の思い出を書かせていただきたい。

公手博さん

公手博さんは、大正一四年(一九二五)一月一五日生。東京都世田谷区出身。昭和一〇年(一九三五)尼崎へ、大庄尋常小学校、御影中学校を卒業、昭和一八年四月村松陸軍少年通信兵学校(現新潟県五泉市)入学、同二〇年三月同校卒業、直に満州の奉天(現中華人民共和国瀋陽市)に駐屯する関東軍通信教育隊に配属、同年八月一五日終戦。シベリア抑留。四年三か月の抑留生活を終えて帰国。抑留時、ドイツ人歯科医の助手を勤めたこともあり、阪神間の歯科医院の技工士を経て、昭和三〇年から歯科技工所開設、七四歳頃から地域研究史料館(現歴史博物館あまがさきアーカイブズ)の自主グループ「尼崎の近世古文書を楽しむ会」と郷土史研究会の「古文書講座」で学び、「楽しむ会」では平成一五年(二〇〇三)頃から、「古文書講座」では平成一七年から、講師として、また幹事として活躍、令和二年享年九六歳で死去された。

私が、公手博さんを知ったのは、「古文書講座」の時であったと思う。当時、郷土史研究会副会長伊藤保先生（後、五代目会長）の古文書初級講座を受講、中級、上級と進み、私は、上級の前半で付いていけなくなり脱会、公手さんは最後まで受講。暫くして、受講生から講師に転向された。伊藤教室での印象はあまり残っていないが、公手さんが、尼崎郷土史研究会誌『みちしるべ』四〇号（平成二四年三月、五〇周年記念特集号）の「伊藤保先生とのお付き合いについて」の中で「歴史に目覚めた私が近世古文書を学びたいと決心し、古文書初級講座で伊藤先生の教えを受け、解読する面白さにとりつかれ辞書が手垢で黒く成る程引きました。（中略）講義の日が来るのが待ち遠しく」と、私が「古文書講座」を苦痛と感じていた時、公手さんは、喜びを感じておられたのだ。この違いが、将来を決定づけることになる（私はいまだに古文書がよく読めない）。

その後、公手さんと私は、伊藤先生の推薦で郷土史研究会の幹事となり、月一回の役員会で御一緒することになった。ある時、公手さんに古文書の学習の秘訣を尋ね

ると「忍耐強く努力することしかありませんね」と言われた。また、自分は地域研究史料館での「尼崎の近世古文書を楽しむ会」にも参加し、NHKの古文書講座も受講していることも明かされた。

公手さんは、古文書解読の指導だけではなく、郷土史研究の面でも貴重な成果を残しておられる。その代表的なものが、地域研究史料館所蔵の梶広子氏文書のうちの「中在家町並み復元絵図」（慶応二年―一八六六―）の復元である。梶広子氏文書は、「古文書を楽しむ会」会員である石井進さん（現郷土史研究会幹事、古文書講座講師）が、整理・目録作成を行った文書で、「絵図」はその文書群の一点。中在家町の様子を知ることのできる貴重な「絵図」であるが、書冊形式で一筆ごとに描かれているため、そのまま見ても、町全体を俯瞰して読みとり、史料として活用することはむずかしい。そこで、「古文書を楽しむ会」会員で、中在家町の歴史にまつわる聞き取り調査などに取り組んでおられた島原典子さん（当時、京都府八幡市、現在尼崎市在住）が、この書冊をもとに一枚の町絵図に翻刻することを思い立たれ、「楽しむ会」

会員の公手さんに持ちかけられた。

こうして公手さんが、平成一二年九月から翌年の四月にかけて、約八か月の作業の後、手書きの「中在家町町並み復元絵図」を完成され、その成果を、平成一三年五月『尼崎市史』を読む会」で、石井さん・島原さんと共に発表された。地域研究史料館の中村光夫さんから職員の指導があつたと思われるが、私は、あらためて公手さん達の古文書の読解力と忍耐力に驚かされた。この絵図の復元によって、中在家町の歴史をじかに目で捉えることができるようになったのではないか。

さらに、公手さんは、古文書の読解力を生かして、郷土史研究に関わる論考も残しておられる。それは、『図説尼崎の歴史』上巻（尼崎市立地域研究史料館編、尼崎市、平成一九年）コラム「側室・澤田すめ」である。「澤田すめ」とは、尼崎藩松平家六代目藩主松平忠栄ただながの母親のことである。この論考は、「楽しむ会」での教材「澤田兼一氏文書」のうち、尼崎藩関係文書に拠ってまとめられたものである。平成一五年五月の『尼崎市史』を読む会」百回記念の例会でも公手さんから報告があり、尼崎

藩内部の実態等を学ばせていただいた。

一方、郷土史研究会でも、長年月、古文書講座の講師として多くの「古文書ファン」を指導され、歴史散歩、歴史講座でも、積極的に案内役や講師をつとめられた。その中で一番印象に残っているのは、平成二七年二月一九日の歴史講座「シベリア抑留記」である。約一時間、原稿なしで、苦しかった抑留生活の一端を語られたことだ。「二度と我々のような悲惨な人間をつくつてはならない」と力説されていたことが思い出される。

こうした公手さんの活躍に対して、地域研究史料館（現歴史博物館あまがさきアーカイブズ）の推薦により、兵庫県から平成二〇年度「ひょうご県民ボランティア活動賞」が授与された。

公手さんは、亡くなられる二年前に「古文書講座」の講師をやめられ、御一人でお過ごしになられたようだ。郷土史研究会には、公手さんの指導を受けた多くの会員が、後に続いている。天上から私達を見守り続けて下さい。

羽間美智子さん

羽間美智子さんは、昭和九年（一九三四）二月二日
生。尼崎市出身。尼崎市立尼崎高等学校卒業。市役所へ
入所。武庫川女子短期大学二部国文科を卒業。市役所で

は、市史編集室、市立図書館、北図書館等に勤務、平成
六年（一九九四）に定年退職。在職中から尼崎郷土史研
究会会員として、会誌『みちしるべ』の編集を担当。幹
事、副会長を勤め、平成二五年には、第六代会長に就
任。平成三十一年に退任、顧問に就任。これまでと同様、
会誌『みちしるべ』の編集を担当。令和三年三月六日死
去。享年八八歳。

私が羽間さんを知ったのは、郷土史研究会に入会し、
平成一七年に幹事に就任した時であった。立花小学校に
あった市立文化財收藏庫での役員会で初めてお会いし
た。物静かな人と思っていたが、ある時、役員会で『み
ちしるべ』の事で、一歩も引かず自分の意見を主張され
たことがあった。信念のある女性だと思った。私などと
も意見を異にした事もあった。

伊藤会長が病気で療養された時は、副会長として共に
会の運営に努めた。その後、羽間さんが会長に就任、三

期六年間つとめられた。私は副会長として、もっと補佐
することがあったと、今は思う。

羽間さんは、現在の会員の中では最も長く、この間、
多くの論考を発表されている。特に、平成八年から『み
ちしるべ』に連載された「宋斤・永尾利三郎と尼崎」と
「第二次大戦下の尼崎のくらし」は印象深いものがある。
前者は、尼崎市立図書館の最初の職員で『尼崎志』
（全三篇、尼崎市、昭和五〇年）の著者にして「宋斤」
の俳号をもつ永尾利三郎の人となりと、その市史編纂事
業等を紹介している。これは平成八年から四回にわたっ
て連載され、生前、単行本として刊行を用意しておられ
た。校正段階前まで作業が済んでおり、令和三年六月
に、神戸新聞総合出版センターより刊行された。

後者は、御自身が経験された第二次大戦下の暮しを、
平成一三年から随時九回に亘って連載された論考であ
る。「国策の基準」が決定された昭和一一年から始まり、
戦時期の尼崎を『尼崎市公報』（大正六年九月から月一回
発行、昭和一七年四月『尼崎市時報』と改題）や当時の新
聞、御自身の記憶でふり返っておられる。この間の尼崎

市民の暮らしぶりが良く分かり大変親しみやすいものとなっている。

また、『みちしるべ』三三三号・三四号の『尼崎の伝説特集号』は、羽間さんの大きな御業績である。これは、北図書館勤務時代の羽間さんが中心となり、編集された『尼崎の伝説』（尼崎市立北図書館、平成三年）を土台に検討を重ねたもので、市内外の人々に「伝説」の所在とその内容を紹介した貴重な成果である。これにより、尼崎郷土史研究会の存在が広く知れわたった。

さらに、市史編集室に勤務し（昭和四五年一〇月から四八年三月まで）地域研究史料館研究紀要『地域史研究』に、平成一一年から一七年まで「文献紹介」を執筆しておられる。若干辛口の書評もあり、羽間さんの性格が窺える。

また、民間の研究団体である「尼崎市・自治体間題研究所」（山城正之理事長）の会誌『季刊まちかど』に一三回にわたって市内各所にある記念碑などを「ザ・モニュメント」として紹介されている。この成果は、後に「尼崎の史跡と文学碑」として、北図書館での展示に

つながっていったようだ。

これは、『尼崎の文学碑を尋ねて』（尼崎郷土史研究会、平成三〇年）の冊子にまとめられている。

他に論考としては、『図説尼崎の歴史』下巻コラム欄に「銃後、疎開、空襲―尼崎市民の戦争体験―」と『たどる調べる尼崎の歴史』に「尼崎の文化財・民俗」がある。ともに羽間さんらしいわかりやすい記述となっている。前者は、『みちしるべ』連載の「第二次大戦下の尼崎のくらし」と『地域史研究』第一一巻第三号の「私の戦争体験 空襲下_に逃げ回る」を踏まえたもので、本格的な論考となっている。後者は、市史編集室勤務時に『尼崎市史』第一〇巻文化財・民俗の項目に関わって、特に「民俗」部門の調査をされたことが、大いに役立っていたと思われる。

郷土史研究会の活動の中では、「歴史散歩」で「明月姫の謎」（平成一七年度）、「尼崎北部の文学碑を訪ねて」（平成一九年度）、「尼崎南部の文学碑を訪ねて」（平成二〇年度）等を担当、豊富な知識と経験に裏付けられた案内であった。バスツアーでは、「晩秋の但馬」（生野銀山）

(平成二〇年度)がひときわ印象に残っている。

歴史講座では、「太平洋戦争下の尼崎のくらし」(尼崎郷土史研究会、平成二六年度)、「伝えてゆきたい 尼崎の記憶」(尼崎市女性センター、令和二年)など、八〇を過ぎても郷土史研究会や市民団体からの講演依頼を引き受けおられた。

郷土史研究会の大先輩のお二人を失ったことは、私達にとつて、大変な痛手であり悲しみではありますが、お二人のこれまでの御業績を偲び、かつ御指導に感謝申し上げます。「思い出」を書かせていただきました。

古文書講師の公手さん 郷土史編集者の羽間さん

宮崎 恭子
(みやざききょうこ)
(尼崎郷土史研究会会員)

公手さん

公手博さんに最初に会ったのは、尼崎郷土史研究会(以降、郷土史会とする)が主催している古文書講座の上級クラスであった。その時の講師は故奥本馨先生で、授業の進め方は、授業がはじまる前、割り当てのところを受講生が板書し、その板書に対して講師が解説するというもの。教材は「宝永春秋記」であった。この文書は、狂歌、川柳などが含まれ、能などを下敷きにその時の権力に対する批判や揶揄を込めて詠まれたものでとても面白く感じ、「すごい教材」と思ったのを記憶している。ただ、字体はもう崩れ、ミミズが這っているような、何が書いてあるのかわからない。その時、古文書の勉強を始めて何年目位であったろうか。難しかった。

板書に当たりその虫食いのように分からないところを授業の前に教えてもらった。その教えてもらった先輩の一人が、公手博さんだった。暫くして、こんどは、地域研究史料館で開かれている「尼崎の近世古文書を楽しむ会」(以降、楽しむ会)に、山村さんという方と共に誘っていただいて、以来、「楽しむ会」では一貫して公手さ